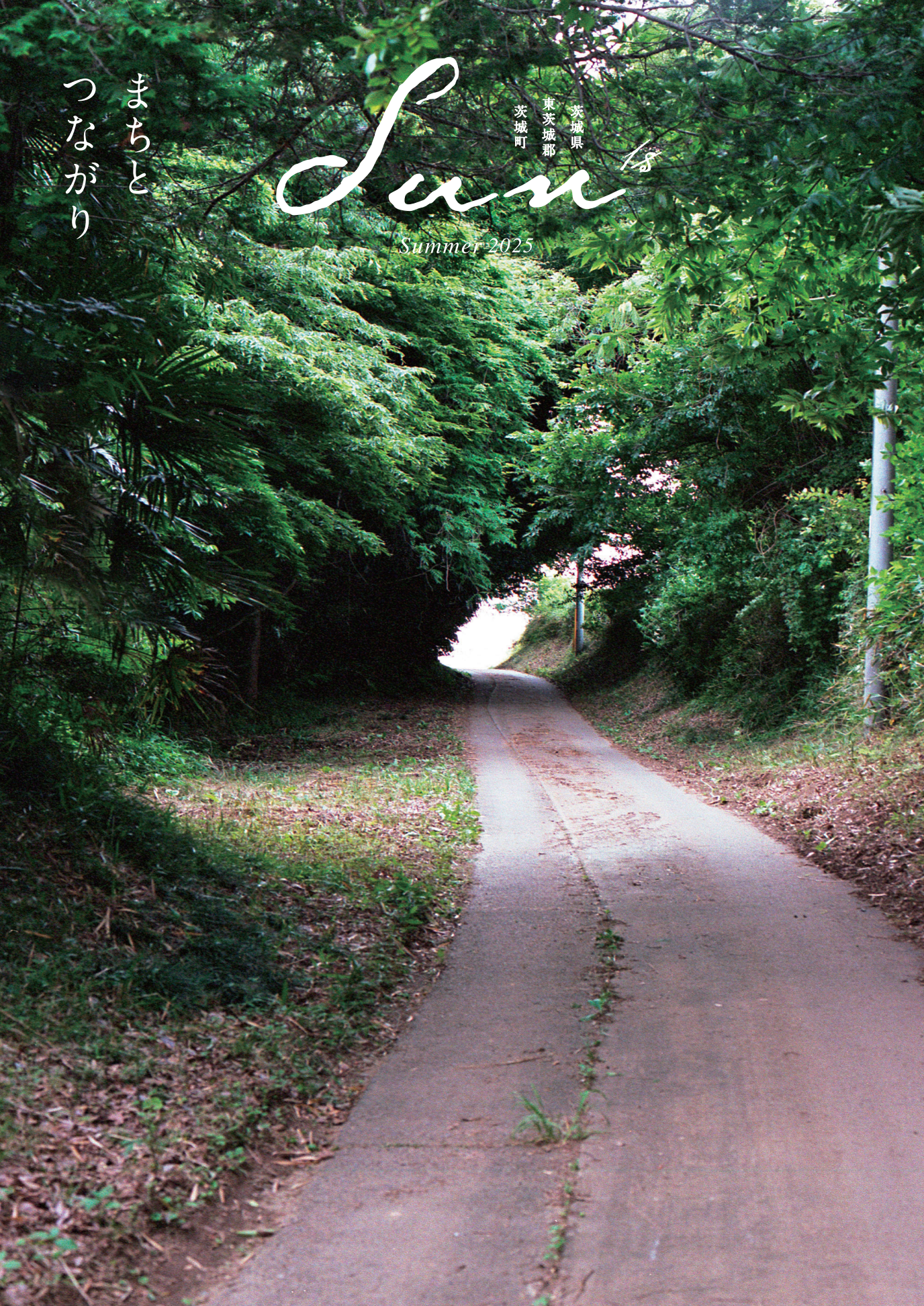


まちと
つながり

茨城県
東茨城郡
茨城町

18
Sum

Summer 2025





撮影場所:海老沢地区

雨後 刻の間^{あひい}

滴る木々 静寂とともに 地に広がる

青田を吹く白南風^{しらほえ} 移ろう季を運び

薄明の時鳥^{ほととぎす} 盛夏の訪れを唄う

Sunは 茨城町と ゆるやかにつながる いくつもの縁を

人々の暮らし 情景と共に 綴り伝えていきます

茨城県
東茨城郡
茨城町
*Sun*¹⁸
Summer 2025

Contents 目次

03 特集一めぐみめぐる

10 Column
「おっそわけ」がつくるもの

11 まちで暮らす人
まちを想う人

17 連載 マチのケンキ

18 編集室から



Cover
“ここは前に来た道 里への路”
取材中、細い道を入っていくと
以前表紙の撮影で訪れた場所を通りかかった。
営みと共に続いてきたであろう里の風景。
変わらずあり続ける、残る意味を
汗を拭い、坂を上りながら改めて想いました。

さあ、どうぞ。

いっただっきまゝす！

さくっ！じゅわっ！んっおいしい！

思いつきかぶりついた瞬間、果汁が口の中に広がった。少し溢れた汁を手で拭い、ガブ、ガブ、と夢中で果肉を頬張る。雨の匂いが漂う梅雨の縁側で食べたわたりのメロンは、ちよつとかたくて、とっても甘くて、優しい故郷の味がした。

誰かがそれを育て、誰かがそれを運び、そしていま、誰かがそれを味わっている。季節の断片のようなその果実は、時にただの「食べもの」ではなく、人と人をつなぐ大切な味だ。

町で生まれた緑色の果実は旅をする。その旅の終わりに、誰かの記憶となる。

この町で、毎年静かに繰り返される営み。ひとつの果実をめぐる、名もなき人たちの連なり。それは多分、どこにもあるよつで、どこにもない風景。

特集

め めぐみ る

茨城町の畑では四季を通じ

沢山の農産物が生産され、出荷されています。

中でも初夏の風物詩でもあるメロンは、全国有数の産地でもあります。

出荷されたメロンはどこへ運ばれ、誰の手元に届くのでしょうか。

生産者、出荷・配送・市場を経て消費者に届くまでを追います。

構成！ 石川聖太 文！ 二川ナオミ 写真！ アラタケンジ





しとしと雨が降る 六月の朝
網掛地区の農道はまるで
メロンの網目のように入り組み
平地林とビニールハウスが織りなす景色が広がります
この地で大規模にメロンを栽培する
福島家を訪ねました

恵みはぐくむ 家族の手仕事

つくる

メロン農家・福島家の風景

朝の作業場に流れる静かな熱

朝八時 福島家の作業場はすでに活気で満ちています。入口には前日に収穫されたメロンの入ったコンテナが積み、その隣では、福島久夫さんが作業のペースを見計らいつつ専用の洗浄機にメロンを流し込む作業をしています。ゴロゴロ転がりながらブラシで磨かれたメロンが機械から出てきては、久夫さんの妻・あけみさんと息子・将也さんによって手際よく選別・仕分けされ、四人の研修生たちによって、ひとつひとつフルーツキャップと呼ばれる緩衝材が被せられていきます。しばらくして、将也さんの妻・綾さんが選別に合流すると、作業スピードはさらに加速。家族と研修生、総勢八人がそれぞれの役割を黙々とこなす息の合った連携作業に圧倒されます。

作業がひと段落し、冗談を飛ばす久夫さんの声に、研修生たちの笑い声が響きます。ちよつとその時やつてきた、顔馴染みの訪問販売員に綾さんが「ちよつとこれ食べてみて」とお茶請けのメロンをおすそわけ。

束の間の休憩時間が終わると、次は箱詰め工程へと移ります。メロンは同じサイズであっても形が微妙に異なるため、上手く箱に収めるには組み合わせを考えながら詰める必要があります。一箱あたり約五キログラムにもなる重さに、経験と体力が求められます。メロンが入った箱は研修生たちによってサイズ別にパレットへ積み上げられると、4し、5しなどサイズを示すスタンプが押されていきます。「崩れると大変だから、最後の固定は必ず自分でやります」と積み上げられた箱をラップでしっかりと固定しながら将也さんは言います。箱詰めされたメロンはそのままとラックに積み、JAの集出荷場へと運ばれていきました。

蒸し暑さのなかでこなす収穫

午後は、翌日出荷分の収穫作業。ビニールハウスに足を踏み入れると、地面いつばいにメロンの蔓が這い、葉の間からメロンが顔を出しています。研修生たちの手を借りて、ずっしり重たいメロンがどんどん収穫されていきます。メロンが入ったコンテナでいつばいになったパレットは、将也さんの運転するフォークリフトで作業場へと運ばれ、翌朝の箱詰め作業まで保管されます。約一〇〇棟ものハウスが立ち並ぶ福島家の敷地には、効率化のため作業用の通路が整備され、トラックをはじめ、トラクターやフォークリフトなどの大型機械が通れるようになっています。「人手や機械がなかったらこうはできません。昔は敷地内が整備されていなくて大変でした。このあたりの土地は斜面なので、ハウスを建てるには整地したり、土が流れないように土留めをつくる必要があります。毎年少しずつ規模を大きくしていったんですよ。」と久夫さんは振り返ります。

つなぐ手、つなぐ味

福島家でメロンの栽培が始まったのは一九八〇年代後半のことでした。タバコを主に栽培していましたが、農業政策の変化もあり、久夫さんの代でメロン栽培に舵を切りました。現在、その中心を担う将也さんはJA水戸茨城町メロン部会の「こだわり研究部」の部長として、品質にこだわったメロン栽培を実践しています。

「高校生のころは、朝に出荷するメロンをトラックへ積み込んでから学校へ行き、帰宅すると手作業で段ボール箱を組み立てたのを覚えてます。メロン栽培は自然が相手で毎年が試行錯誤。でもその分、新しい発見があつて飽きることがありません。大変さも含めて、農業の面白さだと思います。」と将也さんは語ります。

一つひとつの作業を積み重ねながら、日々の営みのなかで育まれる茨城町のメロン。今日もまた、いくつもの手を介し旅支度が整えられていきます。



5ページ：ハウス内を彩るメロンの花。ここからめぐりが始まる。／6ページ：生育状況を見ながら手分けして収穫していく。／運んだメロンを洗浄機に流していく福島久夫さん。／手慣れた様子で選別をしていく。／訪問販売員さんともメロンをきっかけに話も弾む。／タイから来ている研修生たち。／フルーツキャップ。品種によって色を変えている。／メロンの糖度を測る手持屈折計。品質を維持するために大切な器具。



旅立ちを支える
最前線

JA水戸城之内集出荷場



上から高く積まれたメロン。農家さんから代わるがわる持ち込まれたものを検査、選別をしていく。その日の出荷量を入念に確認する渡邊さん。コンベアーに載せられたメロンはトラックに高く積みまれ、各地の市場へ運ばれていく。



生産者の想いとどける

町内で大規模にメロンを生産する農家のうち三八名の生産者がJA水戸の茨城町メロン部会に所属しています。部会員が生産したメロンは城之内地区にあるJAの集出荷場へ持ち込まれます。ここに集められたメロンは品種やサイズ、質、数量といったその日のデータが集計されて、地元をはじめ、東京・群馬・宮城・岩手・新潟などの市場やJAの直売所へと毎日のように出荷されていきます。

ある日の夕方、集出荷場を訪れると検品を終えて荷造りを待つ皆さんのメロン箱が山積みされ、その周囲では一〇人ほどのスタッフが黙々と作業を進めていました。事務所の小窓越しには、忙しそうに電話をしている職員の姿も見えます。JA水戸で茨城町のメロンを担当する渡邊俊介さんは、栽培講習会や巡回指導、出荷計画の立案、市場とのやりとりなど、多岐にわたる業務を担っています。今日は四〇〇〇〜五〇〇〇ケースくらいが集出荷場に届く見込みです。取引先からは発注数量だけでなく、「いつごろ、どんな品種・サイズのメロンがどれくらい出せそうか?」といった問い合わせも寄せられます。そのため生産者の皆さんと日々コミュニケーションを取り、生育状況を把握しながら出荷数量を予測しています。メロンは町の主力作物であり、年間の売り上げは約六億円にのぼります。だからこそ、生産者の努力が無駄にならないよう、品質と単価を維持することが私たちの大切な役割だと考えています。」と渡邊さんは語ります。

建物の外には数台の大型トラックが停車し、近くには出発を待つ運転手たちの姿がありました。話を聞くと「私のトラックは、荷造りが終われば次第、仙台へと向かいます。夕方に出発できれば夜の二〇時くらいには到着する見込みです。この時期になると毎日メロンを運んでいます。」と教えてくれました。夕方、ようやく各市場への仕分け作業が終わると、フォークリフトが動き出し、積み込み作業が始まりました。荷台いっぱいメロンを乗せたトラックが一台、また一台と、取引先の市場に向けて走り出していきました。



オトメやレノンと呼ばれる品種は主に春メロンと呼ばれ、この後に夏メロンと呼ばれる品種が控える。出荷は10月ごろまで続く。



COLUMN

「おっそわけ」がつくるもの

文 | Sun 絵 | 根矢涼香

作物の産地では、野菜や果物は買うものではなく、どこからかいただくものというイメージがある。初夏から夏にかけ、とうもろこしやメロンなどが知らない間に家にあることも多く、みな口々に「近所のひとが持ってきた」「知り合いからのおすすめけで」と語る。

農家さんで取材を終え帰ろうとすると「よかったらこれ持っていきな!」と採れたばかりのメロン2つを袋に入れて持たせてくれた。お礼を伝えながら、おすすめけを渡したりいただくことは多いですか?と尋ねると「多いね。終わりがないんだよ」との答えが返ってきた。知り合いから毎日のようにイチゴや野菜、自家製の漬物などをいただき、畑で採れたものをおすすめけとして渡す、という循環が生まれているそう。以前は摘果していく中で間引いた野菜やキズものを配っていたが、作物の質が良くなったことに加え、農作業の効率化と生産量が増えたことで、おすすめけに回せる量も少なくなった。今では自分たちで食べる分を多めに作り、おすすめけとしているという。それを裏付けるように、別の取材先では「前は時期になると色々な野菜をたくさんいただいたわ。じゃがいもをコンテナ2つ分も持ってきてくれたこともあったの。おすそ分けて量じゃないわよね(笑)。それが今ではもう事自体が少なくなったのよ」という話も聞こえてきた。

おすそわけは、暮らしの中で人の縁を育むきっかけになっている。「たくさん採れたから」「いつもお世話になっているから」という声と一

緒に手渡されるものは、単なる物のやり取りを超え、相手を思いやる気持ちや感謝の意味を運んでいる。そこには打算ではない人の温かみがある。しかし、効率化や省人化が進むにつれ、そうした「間」が生む心遣いやつながりは少しずつ姿を変えている。おすそわけが減ったという話からも分かるように、以前のような関わりの機会は少なくなっていると思う。一方で、意識的に地域のつながりを作ろうという動きも見られる。子どもを中心とした地域コミュニティづくりや、行政や企業が手掛けた交流の場など、新しい形の縁づくりが模索される。ただ、そうした枠組みから作られるつながりと、おすそわけのような生活から自然に生まれてくる「間」とではどこか質の違いを感じるのも確かだ。

多くを手にしたからこそ、普段からお付き合いのある方へおすそわける。いただいた縁があるから、その相手にお返しをしたいと思う。おすそわけは「日々のかんたんなおくりもの」としてあり、コミュニケーションのきっかけとして大切な存在なのだ。

この文章を書いている隣の席で友達同士が「これ食べてみる?」と互いのお菓子を分けあっている。この感覚こそ、おすそわけの本質なんだろうな、と感じた。形は変わっても、相手を思いやる気持ちや自然な分かち合いの心は失われることなく、私たちの日常に息づいているのである。だからこそ、暮らしのなかで生まれる「間」のあり方を改めて考えたい。●

根矢涼香 1994年9月5日生まれ。茨城町出身の俳優。立教大学 現代心理学部卒業。



仙台あおば青果株式会社 鈴木さん。毎朝必ず自分の目で品質を確認する青果店の社長さんなど、こだわりのある取引先からの信頼も熱い。／仙台市中央卸売市場。全国から季節の旬が一堂に集い、消費者の元へ届けられていく。

品質を守っていくために

何かを食べる・使うという消費行為において、効率や価格ばかりが注目される一方で、「安心・安全・高品質」が、「当たり前」に手に入る日常でも実は、その当たり前というのはいえぬ誰かの知恵と努力によって支えられた奇跡のようなシステムなのかもしれません。旅するメロンが届いたら、そのことを想い、味わってみてはいかがでしょうか。それだけで私たちの社会は、少し優しいものになっていくのかもしれない。●

ここが青果の卸売を行う「仙台あおば青果株式会社」は、生産地から届いた青果を、地元の仲卸業者やスーパーマーケットに販売しています。また、仙台市を中継地として、東北地方の他の市場へと商品を送り出す役割も担っています。こちらで長年働く鈴木秀貴さんにお話を伺いました。「茨城町のメロンも、ここで受け取ったあとに仲卸業者の手に渡り、八百屋さんや飲食店などを経て、消費者に届きます。時期になると取引先から注文が入るので、それを受けて生産地に連絡や調整をして、必要な数量を確保できるようにしています。メロンの時期が年間で一番忙しかもしれません。」と話す間にも、鈴木さんの携帯電話が鳴っていました。



とどける

様々な旬を 消費者へ

仙台市中央卸売市場





町の中央を走る旧国道六号線沿いで、一際目を引くピンクの建物。看板には「家電・電気工事」に「CD」、それから「パン」「コーヒー」、さらには「そば」。好奇心をくすぐられるこの店は、実は創業七〇年を超える老舗です。業態を変えながらもカザマデンキを長年続けてきた、風間薫さん・秀子さんご夫妻にお話を伺いました。

父から受け継いだ店

風間薫（以下、薫） 四人兄弟の末っ子として一九五二年に生まれ、そのころには父はカザマデンキを始めていました。当時は小鶴商店街に自宅兼店舗がありました。私が高校生になるころに火事に遭い、建て替えと同時に今の場所に移りました。高校は石岡商業高校で、妻とは同級生でした。その後、高千穂商科大学（現在の高千穂大学）に進学して商業を学び、都内のコーヒー問屋の内定をもらっていましたが、父から「家業を手伝ってくれ」と言われてすぐに長男も手伝っていました。手が回らなかったのだと思います。そこが人生の変わり目だったかもしれません。

茨城町に戻った二年後、学生時代から付き合っていた妻と結婚しました。妻は高校卒業後に製鋼会社に勤めていましたが、結婚後は一緒にカザマデンキを手



やっていたいことを
ふたりで
まちで暮らす人
カザマデンキ 風間薫 風間秀子
写真：アラタシノ 文：坂倉年

まちで暮らす人
まちを想う人

— Feeling × Thinking

伝うようになりました。私が外回りで電気工事、妻が店の担当でした。当時から電気工事のほかに、店内で家電を販売し、CDやカセットテープも扱う珍しい電気屋だったと思います。父は音楽好きというわけでもなく「その時代に売れるもの」を売る」という人でした。火事の後に急いで建てたこともあり、私たちが三五歳の時にもう一度店を建て替えることになりました。そういえば、当時は父が防火用に作った三メートルプールが裏にあり、夏は近所の子供達が遊びに来ていましたが、それも建て替えた時に埋めてしまいました。父は工事の前に亡くなり、新しい店を見ることができませんでした。壁がピンクなのは妻の好みです。完成した時は近所の人びつくりしていました。それからは二人で店を続けています。

CDからそばへ

風間秀子（以下、秀子） 二度目の建て替え以降、家電は置かずCDや音楽ソフトを二面に並べていました。お客さんに大工さんや溶接のできる職人さんがいて、お店の内装で「こういうのが欲しいんだ」と言ったら作ってくれました。お客さんとの付き合いは多く、昔は夏に店の前でバーベキューをしたり、マイクロバスで遊園地に行ったりしました。入り口の上にある時計も、お客さんから連名でいただいたものです。

当時は親子でCDを買いに来るお客さんもいて、子供がいつか自分で来るようになって「続いていくんだなあ」と思っていました。でも、時代が変わりパタッとCDが売れなくなつて、そうしているうちに東日本大震災もあつて。その後も工事の事はあつたけど、お客さんはほとんど来ないし、私は店をただ待っているだけで「これはなんとかしなくては」と思うようになりました。そこで、喫茶店をやりたいと夫に言ったら「やったらいい」というので、大工さんと呼んで厨房を作ってもらいました。まずはパンやコーヒーをと思っていたら、綺麗にできた厨房を見て夫が「そば屋でもやるか。俺が打ってお前が茹でればいんだから」と言い出して、「まあいいよ」とやっていたらそばがだんだん人気になって、お客さんが

増えてきたので席を増やさなきゃとテーブルが増え、CDが追いやられ…。
今では他所にないからと演歌だけは置いています。

「見てたんだ」

薫 飲食店をしたいと妻から聞いた時は、反対する理由がありませんでした。食っていくにはこの方向しかないだろうなど。兄たちが飲食の仕事で、その影響で調理師免許は取っていたのですぐに舵を切れました。何より、妻は嫁いで来てから一人ですとお店に立っている人なことをやってくれていて、だから妻がやりたいことはやらせてあげたいと思っていました。それまで、妻が何かをやりたいうこともそんなになかったので、やりたいことは一緒にやればと思っていました。

秀子 ああ、そうだったんだ。そういう気持ちがあったんだ(笑)。夫はお義父さんが亡くなる前は結構好きなおじいちゃんの人で、それでも私は後ろ指差されたりするもんかと頑張ってきたんですが、それを見てたんだ、分かったんだって、今初めて知りました(笑)。

思い返すと、震災の後に私の身近な方が続けて亡くなり「私だっていつ死んじゃうかわからないから、その前に好きなことをやろう」と思ったことも背中を押しましたね。それに夫のことも、喫茶店をやりたいのかなってずっと見ていましたから。よくお客さんに「コーヒ」を淹れていたし、私に「コーヒ」の淹れ方を教えてくれたのもこの人でした。

来てくれるお客さんは、みんな大事です。初めての方も、昔馴染みの方も、遠くから足を運んでくれる方も。美味しいって食べてくれて「また来るね」って帰ってくれるのが一番ですね。二人とも元気なうちはお店を続けたいので、来てくださった皆さんには「元気玉ちょうだい！」って思ってますよ(笑)。「みんな、ちょっと元気分けてくれー！」って(笑)。

帰る場所を持ちながら つくる人であり続ける

まちを想う人

株式会社東北新社映像プロデューサー

写真 吉田一之 文 石川歩

海老澤伸



一九八五年生まれの海老澤さんは、幼稚園の年中まで東京で、その後は茨城町下石崎で暮らしました。姉の影響でギターに触れ、学生時代はバンドを組む一方で、陸上やラグビーに打ち込みます。現在は、東京で映像プロデューサーとして活躍中です。自身を「流されるように生きてきた」と語りますが、周囲の声に耳を傾けつつ自分の感覚に正直に進路を選ぶしなやかな姿勢は、なかなか真似できることではありません。

涸沼のほとりには、リアル『ぼくのなつやすみ』があった

高校卒業まで涸沼のほとりで育ちました。田んぼに囲まれた家で、少し歩けば森と涸沼があつて、夏は昆虫採集、冬は焚き火で焼き芋をするんです。『ぼくのなつやすみ』というゲームソフトがありますが、あの世界観で生きていましたね。中学校は家から一〇キロ離れていて、自転車通っていました。陸上部で二五〇メートル走をやっていたので、朝六時に起きて自転車で一〇キロ走って、朝練、授業、放課後練習をして、二〇キロ漕いで帰宅する生活です。振り返ると過酷ですが、この経験が今のハードな仕事に耐えられる基礎体力になったと思います。

押入れのギターが音楽との出会い

音楽が好きで、今でも毎年フェスに行きます。きっかけは小学生の時に弾いた父親のフォークギター。三歳上の姉が押し入れから引っ張り出してきて、姉が飽きて僕に回ってきたんです。中学最後の学園祭では「BRAHMANC（ブー）バンド」をしました。その後、水戸市の高校に進学して軽音楽部に入ったのですが、物足りなくなつて友人のいたラグビー部に編入しました。自分はいわゆる「陽キャタイプではないと思うのですが、体を動かすのは好きなんです」。

大学は千葉大学の経済学科です。友人が「経済学は面白そう」と話しているのを聞いて決めました。大学寮で音楽の趣味が合う仲間と出会ってバン

ドを組み、先輩に紹介してもらった焼肉店で四年間アルバイトをしたのが思い出です。学生時代を振り返ると、流れに身を任せて、その時々自分の感覚で選択して生きてきたように思います。

『JOY』に惹かれて映像の道に進む

就職活動で将来を考えた時に、ふとYUKIの『JOY』のミュージックビデオを思い出しました。個性的なダンス映像を見て「映像って面白そうだな」と惹かれたんです。特に、限られた時間で勝負するCMの世界で働いてみたかった。それで、都内のCM制作会社に入社しました。

映像プロデューサーという仕事は、ゼロからイチを生み出すよりも、誰かのアイデアを二〇まで引き上げていく役割が大きいです。学生時代の話に通じますが、僕は人から影響を受けて進路を決めてきたタイプで、強いこだわりがあるわけではない。そうした自分の性分に、この仕事は合っていました。それにCMの仕事は扱う商材が毎回違うので、考えることが常に変化していきます。この振れ幅の大きさが僕の仕事の不思議なところで、飽きることがありません。友人から「ミュージックビデオが好きだったよね」と連絡がきて、バンドのミュージックビデオを担当したこともあります。偶然にもロケ地が涸沼自然



公園！地元が映像に残るのは嬉しかったですね。ずっと音楽好きだった僕にとつて、仕事で音楽に関われるのはとてもありがたいことです。

映像の仕事は、面白さを実感するまでに時間がかかります。僕が仕事を面白くと思ったのは四年目からでした。だから、後輩には日々の業務で自分の仕事の魅力を実感してほしいんですね。とはいえ、業界の特性上うまくいかなかった部分だけを指摘されて、その背景やプロセスが省略されることは少なくありません。僕が後輩にフィードバックする時は、まず感謝の気持ちを伝えて、何がなぜNGなのか過程を説明します。映像プロデューサーという仕事が、ただ「しんどいだけの仕事」になるのは悲しいですから。

星空で聴いた音楽が、僕の原点

案件が重なると、タクシーで打ち合わせをしながら次のアポイント先に向かうような慌ただしい日々が続きます。でも、ある案件が終わった時に、効率だけを追いかける自分の行動に嫌気がさしました。時間効率を考えたらタクシー移動が正解だけれど、その「正しさ」に抗いたくて、できるだけ電車を使っています。そして、ぎゅう詰め急行より空いている各駅停車を選ぶ。そんなふうに少しでもゆとりある日々を過ごしたいんです。こう考えるのは、茨城町というのどかな町で育ったからかもしれません。実は、特急たちの運行で便利になったのはいいけれど、少しだけ寂しくもあります。

茨城町としては、人口を増やして発展することが求められているのかもしれませんが、でも僕にとつては、ゆつたり時間が流れて、誰もがのびのびと過ごせる、そんな「帰る場所」のままであり続けてほしいです。東京で暮らしていると、茨城町の笑っちゃうほどきれいな星空を思い出します。学生時代、ウォークマンで音楽を聴きながら空を見上げて「オリオン座がきれいだな」と帰ったあの時間。澄んだ空気と、なぜか胸が高鳴るようなあの感覚が、今振り返ると自分の原点なんだと思います。●



涸沼のガイドブックが完成しました!

いば3のサポーターが制作に関わった
涸沼の環境観光ガイドブックが完成しました。
涸沼周辺のスポットや観光地を紹介しています。
茨城町の水鳥湿地センターをはじめ
町内のお店などでも配布中です。
これからの季節、ガイドブックを片手に
涸沼で遊びつくそう!!!



いばらきデザインセレクション2024 知事選定に選ばれました!

茨城の優れたデザインに贈られるいばらきデザインセレクション。
2024年度の選定に、Sunが知事選定に選ばれました!
これからも、まちの空気を伝える冊子としてサポーターと歩んでいきます。

From Sun -編集室から-

Sun 第18号をお届けします。

小さいころ、家族と見上げた星空。学生時代、部活帰りにひとり見上げた星空。進学で茨城を離れ、東京で友人たちと見上げた星空。空はつながっているのに、どうして印象が違うのでしょうか。久しぶりに見上げた町の星空は、私の中でもどこかほっとする“帰る場所”となっていたと感じました。[シロクマさん]／中学生のころ、カザマデンキさんにシングルCDを買いに行った記憶が蘇りました。お二人の硬い絆に感動しました。今度は、手打ち蕎麦を食べに行ってみようと思います。[963]／自分の住んでいる地域では採れない野菜や果物などが食べられるとはどういうことなのか。その季節の旬なものが、どこにいても手にとれる幸せを改めて感じました。[しげ③]／近所からのメロンやとうもろこしが自然に家に届く、まるで地域の温かさを象徴する心のギフト。おすそわけのやり取りが絆を深め、わたしたちの日常に彩りを加えているのだと思います。[SuzuⅢ]／暮らしの中の当たり前なことが、実は沢山の人の色々な関わりで動いている。どんなに効率化が進もうと、そこには人の支えが必ずある。人がもたらす豊かさ、あたたかさを忘れてはいけな、と今号の取材を通じて改めて思いました。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。

いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト town.ibaraki.lg.jp/iba3

Sun 第18号 夏号 2025年8月1日発行

企画・発行:いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
[茨城町 町長公室 秘書広聴課]
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL:029-240-7148 MAIL:iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン | i,D
取材・執筆 | 二川ナオミ 板谷卓 石川歩 石川聖太
写真 | アラタケンジ 吉田一之
絵 | 根矢涼香 やまなかももこ
印刷・製本 | 株式会社光和印刷
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

Special Thanks [順不同]

通野修輔さん 福島久夫さん 福島あけみさん
福島将也さん 福島綾さん 研修生のみなさん
土地晴彦さん 渡邊俊介さん 鈴木秀貴さん
JA水戸南部営農資材センター 仙台あおば青果株式会社
株式会社東北新社



お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”はいばらきまちがつくるあたらしくてゆるやかなつながりの場。
設立から8年目を迎え、
会員数は1,000名を突破!
ますます盛り上がる“いば3”と
みんなでつながろう!!!



いば3 WEBサイト

梅雨のある夜、地域の人たちが主催したホテルの観察会に出かけました。住宅地の奥にある古い集落を抜け、急な坂道を下ると、鳥の鳴き声が響く暗い棚田の上を黄色い光がゆつくりと舞います。参加者たちはその幻想的な風景に思わず声をあげていました。

町内には、谷津と呼ばれる丘陵地が侵食された谷状の湿地があります。雨が地中に染み込み、斜面から湧き出て谷底に流れ、人々はそこに溜池や棚田を作りました。谷津の入り口には決まって古くからの集落があります。稲作の始まりは谷津からとされる説があるほど、人々は谷津から得られる恵みを受けて暮らしてきました。

谷津には四季を通じて昆虫や鳥をはじめ様々な生物が見られます。ホテルやトンボが舞い、小川や田にはカエル、メダカが暮らし、雑木林では鳥たちが声を響かせ、カブトムシやクワガタムシも多く、湿地を好む鷺やカワセミも姿を現します。

観察会の翌日、早朝に谷津を訪れてみました。青々とした田に水を入れる農家さん、ウォーキングや犬の散歩をする住民など、今も地域の暮らしに欠かせない場所なんだな、と棚田の上を吹く風を感じながら思いました。

谷津は、地域で暮らす人たちの原風景であるとともに、持続可能な生活環境として後世に伝わっていつてほしいと思います。谷底から湧く水には、生物や人々の暮らしの記憶が含まれ、こんなに湧き出ているのかもしれないね。●

絵:やまなかももこ

画家。絵本作家。女子美術大学卒。
絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
主な作品に「田んぼのいのち」(くもん出版)、
「俵万智3・11短歌集 あれから」(今人舎)など。
momokomo.net

これからも様々な生命の営みが
続く場所であってほしいと思います。



連載

マチの ケシキ



第18回 ホテルと水の記憶

絵 | やまなかももこ 文 | 石川聖太

